

ふじみサラダボール子育て情報

「言葉からことばへ」

平成30年10月17日号

板橋富士見幼稚園



お話と語りの世界の向こうに

1歳を過ぎた頃からお母さんやお父さんは、よく添い寝をしながら絵本の読み聞かせをします。腕を枕に、体を脇腹にしっかりと寄せて、「むかし、むかし・・・」と語りはじめます。また、ある時は、膝の上に抱いて、胸にしっかりと抱き、お話を読まれた経験もあるでしょう。

子どもが絵本を読んでもらったり、お話を聞かせてもらったりするとき、1番大切なことは、実は「読み聞かせ」ではないのです。

1日数回、親としっかり肌からの温もりを感じとる時間を求めているのです。安心感や安定感そして、信頼の絆を確かめる一時なのです。

不安定な抱き方や、ソワソワした添い寝では、子どもは安定できず話もほとんど聞き取ろうとはしません。



親子がしっかりとした安定した絆の中で、はじめて絵本や読み聞かせが、知的発達を促します。

とかく絵本や物語を教えようとしていたり、文字に興味を持たせようとする人がいますが、本来早期にこうしたことをすべきことではありません。

親子の絆を一日の中でどのくらい多く作れるかが、その後の幼児の育ちに大きく影響します。乳幼児期の絵本とは、単にその「つなぐ物」としてあるのです。ただその「つなぐ物」が、結果として知的な経験として役立っているということになります。

乳幼児期は、毎日、数時間の親との関係が必要だと言われます。1964年にボルビーという心理学者は、WHOの依頼を受け、母子関係の愛着調査をおこない「アタッチメント」という言葉を発信しました。

アタッチメントとは、幼児期の母子愛関係のことを言います。愛される安定感はその後の成長に大きく左右します。それは、人は一人では生きていくことができない動物で、人に依存して生きていきながら自立していくからです。

自立を早める手助けが、親子との絆となるのです。ただ、親子で、数時間一緒にいるということだけではなく、体と体を寄せ合うことが大事なポイントです。焦らず、ゆったりと子育てを楽しみましょう。